ル 呂 3
1789
5

東海道名所記　五

亀山より
山科まで

亀山より関地蔵まで一里半
右の方に城あり。宿町の中ほどに城代大手あり
野尻　左の方東の入口まで沢川あり
かうろの村　実川　続乃町村　右の方に
みづえ野の明星山とてうつくしき山あり。其外
ありく楽行次くるしみなる家
猿人のあつまりける亀山ハ
もとハ山とつけたりしなり
実は宿のうちに右の方に八幡宮あり。其神主
まつる追分あり

関より鈴鹿乃坂の下まて一里半六町
楽ハ佛のうりせらるゝまゝ人のやつてくる人ぞかし。
この宿に地蔵堂あり。むかし紫野の一休和
尚旅行とりのひしまに。此乃山本に地蔵
ありけるとつたまちて。此れハそも法楽の僧乃。
それをしたるハと於ことく。開眼とてしえて給ふ
和尚一休とこうけありて。ふぎまんと於こし
たゞ和尚ハやさしくもうひしさまひけれちう地
蔵にうちむひてよ葉にかきて
釈迦ハすぎ弥勒ハいまだいでぬまの此
うきはうき世の間わかし地蔵
こしみてさらとまりのひめ。在所乃人く 寺安

かゝぬすりうがちとこそ守眼くやうと申すなれハ
鑰儀さしく。総ともよみ。その外かくの儀は
わすへきすまもかなし。ほけきよかなふるまみちなし
てら通りまてそくわんの○とてお。その地かな
るの僧とやといひて。開眼とつゝしお頼み申す。かの僧
とくもく鑰儀をのへてかひ。九條乃袈裟に座具
そりそく。精乃珠数をすり。地蔵発願を合廻向一
くさと南無まよみ。座経まわり。鼻からつゝ
て。地蔵乃すりかへくこきのべ。追従らし啓白
して。此本北老若男女いろいハ切利乃天人よ
ひとしく。あまらハ金剛不壊乃すぐんへ。疏の
さまへハ。その大命もこう。田畠ハ種を種つえ。

雨風乃難りなく。火難水難乃おそれもなかるべし。
ましてや此本尊ハ勝軍地蔵なり。さらひ大て
き海道ありといふとも心づよなるべし
らずなん。ごとくきよしと[illegible]ひらし。忽
ち此みちとをらなるべからず。諸人これをしる
とのうちなんくやくをまぬかれ。道中のなんぎ
なくしてそのみちをあゆみ。地蔵さまの
つきそひ。信じさせ給へバ名僧乃く[illegible]
よりて同じおきけるものと。いつまでもいかな
くやしきよりのしけるかぎりなきのとくまし
て。へせといひて。大悲心をおこしてひたすら
どもべくねがひきて。一体とよびてぞ

ともかくてありけるみちの守りとしてとなへかくし
より。地蔵もしづかなるをいのれ。今まよくれをうる
乃地蔵とおがみて。まことにひとつの地蔵さまの
であるとぞ
右の関とハ十年ハ。いまし桐坂乃関 近江にあり。
あり。鈴鹿乃関伊勢にあり。不破の関美濃にあり。
これを三関とよぶ。逢坂よりして東を
関東とよむ。又すべて世にいふ所の鈴鹿の関
ありといひつたへし
宿乃中にハ。若竹と名づけて。ひやうぞ。火難よりて
まて賣也。東国。北国。伊勢参宮の旅人をはこぶ
ならひや。遊女ありしがなくなりしとぞ

かひ。都とこのてく。猿人ととぶし
町をうち左にく右城乃総あり。一瀬村
絵麻川あるひハ右ニ流る。あるひハ右ニあり。
またハ橋とよもうか。あすかの淀めし如まで。て瀬を
わり。八十瀬乃川といふハこれなり。彩勤撰ニ
俊成卿乃歌

かり初ていつまて淵りぬあすかがハ
やそせもしる世の月毎のころ

新後撰定家卿の歌ニ

あすかも世これやあすかが乃宮ならん
かりすそうなる花のかげかな

又玉葉集ニ條藤子内親王野の宮よりおのつから

てるみのあけかほるハ
あすか川やそせの波ハあらわせて
よるの世神のめうし比ろうか

わふし夕立ひしとりときけまづ男
流れゆく八十瀬乃波も荒く
毎ありてふすもあすか川しるか

彩番や
晨い四季よもし野花と

名嵐村
わりてうるか

鈴鹿の坂の下より筆捨山へ二里半
其の名ハ坂也しかも川あふれて。宿ハ川ぞひま
まつまでおりしハ九ケ年八幡延寛のとし
ちはやき大雨ふり。山くづれて鈴鹿のへお
おく橋どもよりも町より今此宿ハ坂より七
八町ほど下におり。宿のうちに橋あり。
次此橋より坂ハちかくなる。坂の此ごろ八町ほど
坂口の右のかたに社あり。世にかよひけるハ。
この所神ハ鈴鹿御前とて。天照大神の御宮
まつりしとなり。其かみ天照
鈴ハ大神の御まへよりそびやかされ。吉野の
とやて伊賀越をとして。伊勢の国へ

に。あらずして。むかしの翁(おきな)といへるもの
霊(れい)あらはれきたり神なりといへるをもつて
さ候(さふら)へ筆(ふで)にはしめてしるしたるのみなり
その翁(おきな)の社(やしろ)ありけるとなむ
みちのく此山には鬼神(きじん)すみて人をなやましけると
田村丸(たむらまる)のうちほろぼしたりとや。みなみの説(せつ)には苅田丸(かりたまる)
うちたいらげたるよしいへり。さればいにしへより
の説(せつ)にもしるしおかずや。ともかくも山賊(さんぞく)のたぐひ
ありといへるもなきにしもあらず。さればかの鬼(おに)とはいふかなるや。
中比(なかごろ)石草丸(いしくさまる)とて盗人(ぬすびと)のかしらありて。河内(かはち)と
大和(やまと)の両国(りやうごく)のさかひなる生駒越(いこまごえ)の峠(たうげ)にかくれて
鬼神(きじん)の怪異(けい)をなして往来(わうらい)の人をおびやかし。財物(ざいもつ)を追(おひ)

おどし人をまどはしけるとかや。立田山(たつたやま)に鬼(おに)あり
といひつたへしも。むかし人の本意(ほい)なれば。ゆゑや。
風ふけばおきつ白浪(しらなみ)たつた山よはにや君がひとり越(こ)ゆらん。
とよみしは。むかし人。されば。そのむかし山をめぐ
人もみなわするゝ事なきに。鬼(おに)といへる物ありて。伊勢(いせ)三郎
が盛(もり)も鈴鹿(すゞか)山の山賊(さんぞく)なりしが。よしつねにつかへて
坂上田村堂(たむらだう)あり。又東国(とうごく)にかくれなきつはものにて
むかしのつはものにて。今は世にかくれなきひとなり。此
[illegible]
さて又山右には[illegible]の峯(みね)あり。伊勢浦(いせうら)
の[illegible]山の[illegible]とみて。風
[illegible]

あふぢ森こして茶屋あり。そのあたりにすまふのうり
て京あり。伊勢(いせ)近江(あふみ)乃国ざかひなり
海江(きりえ) まの下ニ茶屋小島(こじま)とよふそこ 湯乃まゐ
○蟹坂(かにがさか) 蟹(かに)が石塔(せきたふ)ハ右のかたまわり松二本たてり。
むかし此所ニ妖性(ばけもの)ありて。往来乃人をなやまし侍(じ)
る。ある高僧(かうそう)二人(ふたり)家(いへ)居(ゐ)とよりまかりたまひ。かの
妖性(ばけもの)かたり。偈(げ)をよみかけ向(むか)ひていはく。かの
ものぞ人のきさんとみづからのかたちのこゝへていふ
く。あるは蜜(き)にえて。双眼(さうがん)天ニ聳(そび)て八足(そく)横行(わうぎやう)し
てこのむなりといふ。偈(げ)をたちからかけりていふく。
横行(わうぎやう)ハまゝゆくとまかり。双眼(さうがん)天ニ聳(そび)たりのあまり
蜜(き)にえて八足(そく)ゆかてまふかゆかむ。海(かい)ハ汁(じふ)かあて

蟹(かに)よりわかれてやはりいそげるにわかれにはつ戒(かい)
をさづけたまへば。ことぐくきえうせぬ。今にその寺
ありて。今に石塔(せきたふ)あり
坂乃下より。近江(あふみ)乃湖水(こすい)。水口(みなくち)乃城(しろ)の山かみ
白川橋(はし)。長さ十二間(けん)。その上乃松山にて。西村丸
鬼神(きじん)とかひのありかやつくる
生野(いくの)
燕(つばくろ)の 茶屋あり館(あん)と薬(くすり)にて丹波(たんば)おそまけ
幾(そ)の巻あり大江山(おほえやま)にて世のためとものとしてみとひ
て楽(がく)にほ
近江(あふみ)のうつて世乃村の茶屋にやすむ
まざりもとめ館(あん)乃摘(つみ)りそ
新(しん)田今ハ西行(さいぎやう)かへし山の寺

冷泉むかしさ世流もしになりすてて
いろにかゝりゆく袖ぞあはれなる
拾遺和歌集に斎宮女御の哥
世にふれバまたもこえけりすゞか山
むかしの今よなるにやあるらん
樂ハ深くぞよみけるが
なりあげてされどもすゞ山の松なぶり
てるもかゝると人やいふらん

古山より水口まで二里半七町

舊は古山といへども山のなかしとて。楽師や
ぐそばが剣さけりたり。秋韜毛傳などいふ書物に
石山とかきて。つちのやまとよませ。古山と
かきて。つちのやまとよみたり。さのみは相せ
ず。不審しのつかはしり。つまびらかならぬし
かども。あと石よのよみ怨やうれ。やえとまでも。
山のかたち。山とふ名はつるさりまかへゆしきず。
なるさども、このしとめて。又家様の仕とりつる
様わりすず。やつまり人の作ももしず。此母は
まざれど。山もさかりて。先ばかまで。平地まかる
ともかりが。若高山とくく山のてまかへもたへず。園

かり名もなしとて。昔中には闇でありし。その上きさ
すこしなる所なれば皐といふ。神みなさせりとは
いふなりがたし。むかしは舊も山やありけん。又は皐み
のさびひ欲さすらん舊もひきくめなりたる所
みちもいちずちず。佐けつゆひてもとひなれぞ。楽
阿弥などといふて赤面して、いかになるひと
は学文者とみしあれに。如何なる祖師西来意
とこひくふ。答えるどもいはずして。又家乃やまさて
半はぐよくしてもなひするなるといふぞ。なさ
なきよくて。わきてこそ禅家の本師定前の
歯醫師といふ申しまといふぞ。よくみるさよねき
さそいふ本来の面目とうしかなる名半分のとひふかまさ

あつまより馬かご一人まへみなて後ハ御前様よ
問まう。いかなかくされ。三界流浪とつひなわぞ楽
何ぶしくてかくら。鼻かひ。胸かひ。腹かひとふう
まくぐ。出すぎ乃かい半しと烝して打通る。
かの性空上人のぐるうさを忘つまし半もで。
ひつ移て。男ハをうしかりもろ。ゆしきま法門
と忘す母しよりと。らくい何涌いり便して。足ハ草
びまうり。えじうをまうしにありて。宮ほとなろ。
宮乃へ口右のそうに田村明神乃社あり
その白川橋ちさけよ次。ぐん善哉乃塩梅ハ
あり中二ぐんと。歩行路乃飛郷仕ゆ様こす
松尾村　峯の村まおよあすさけとつうりてゆゑ

岩室村　市場村　ふく京村　大の村
今宿　いす川　さでしろ　新庄村
水口より石部まで三里半
宮乃へ口よ蝦あれぞ。何とふしずず。女乃まふう
てまやくいふはおまハ何年一度んとふ人ハ揺
人をとぐむけろ。女房ともの都也とふ。男やて。
かの菜半乃ぐまめしおそてりうく忘るるとら
けり亭と忘ひて
みなくちよわきやうしかんをおぜ之人
野洲忘てしてりつこ忘るよよ
とよみたり。楽何泳つて室う。いづや家よたをあり
何りんとつふ。男も草鞋より。白ハくのかぎもめり

京わんぞ。きつう良いといふ家に。女房ともに町中へだして
わらく。いかゞしては人〴〵よりわしりきけられずふ。
て見るといふぞも。ぜひ悔ぬりきもいひといふ。ぞとも。女房は
耳にもやつはかん。元種より安のうちにひとさるぢ。
楽行院もぴきはり勤ん。ぶやうけはりくめの
もとするか。むかしより高うやうい。鯛汁といふは
いふ。此宿は三百六十日。旅人へ。ごぢやう汁の振飯
とむる家也とやつてよけり。此の後とぞうりて。馬
葉ときさるせ。ずあまひとしく日は年あわれぞ。皆
ごぢやうかあつとへ人此ひのてゝし。ふたのはにうとくと。
ころ牛乃きころかさまといふて。此家は皆勇みを
川のわたりく田地たちわれぞ。鯛鼻ととりて。売に来れ

ならいとききは楽行院にて。たゞ今来たらぬぞういの般
行綱おうんとをいひて
いはぞく此田地にてぞく鯛とぞ
振飯の汁に鯛をもゆめゆすする
ころみせる也。つ昇はゆ人引いつまるる。爾一とよつこ此
宿は宿中一番此人とお家りて。帯子すぐ美さ
旅人を通めしと形すゞ。家はやよはいつつりめ付すそ
さらぶやの亭主は。鯉此乃翁そて。ぶりふき地が
つもりそろ中よ。この在の中わずかよ。在鯉ぶ江の
別也。この方にゆけし釈喜堂あり。大鏡寺とよ
はぐいかし人。甲国江州の甲賀の邑に。甲賀の
三郎。二郎ども三郎とて兄弟三人あり。常に山中

めぐり。膝とうつして世にふりける。その兄すゑは
ところ三人ならうまく。如楼の名ある懸山みゆる
へ分ちけるに。此山の神。大蛇のかたちとなりて有つるハ
是かくれり。兄二人ハかくれてみげありけしと。三郎
ふところまり。神とて御かまく。つかれその作と
きりとりしぬ。兄二人膝とうちしに。三郎まなび
行りといひつたへて。三郎とうちへて当座にまかせ
おとしてこのみす。さりれども三郎孔子せずし
て。あちこち地より大蛇とおもふ。ずれもむ其手に完
かね来て。その園小蕊乃松原にありけ通る。
家には三郎が妻子ハ。三郎をまてる山中にありて。
大蛇のすみかにとらまれつくしてそこ。かれ三疑なし。

乱でて此観音堂にこもりて。ふかく祈りとめ
しるは凡三年にわたる日。かの大蛇若くとゆるしく
思ひ。水蕊乃松原より窟にいりて。住まふりそれ。星
人おう出でとひてのぞけし所。妻子もいまし人乃
三郎ありとみの生ごも。かつぬすむる世それバ井そ
まちつらんに。三郎ハ大蛇よなりかりしも見えず。
家のしてわかれたる乃淡まりしく。変化ぞうるる
ときょりぱなりて縁かのしき。観音堂乃縁の多
に窟へ。とまりありて。南無観世音大ぢきりとうちん
とするに。舌淡くしてものもいはれぬ。南と
計いひるの時に。観音眉間より。ひかりをはなちて。
大蛇とてらしたまへば。舌やりとけにかりて。南無観

世尊大かくといふあり。此寺乃しゆかの
太じや。さらぬ地に蛻て。りやの三郎とかや云けり。
もとより武井ありけるも。妻子ハおもしみ
わすれて待しかども。さすがに患難乃かなしけ
わすれまくて縁子ハその心乃ことくまた婦か
やなご乃契りあさからず。ふたりともに三郎も次
郎もわかれて自害しけり。三郎一つ井みて
甲賀の押領使となりて。源何乃父待ちし。ふく
て三郎ハ又ちかの国よりひきこもり。諏訪乃
明神此化現としてあらはれ給ふ。人の首をはつさ
待りとかや
この宿よりハ津ばら鍛裏。金敷などあまたあり。

美濃路より八近江路にへて京こゑ乃邑までも
里。水口ごもろも名物也
町ハかつ出右の方此松をやし此中よりハ八幡乃宮や
あり。おの林乃中に郭公鳴きわれで染付
八幡乃あとのそでなやはとらぬに
左乃かたに法茶やあり　馬場村　小服村　ゑぞ村
横田川　土橋あり　洪水のおりハ舟渡し也
田川　茶やあり　みくも村　うしかハ村　なつミ村
夏見村　ひら松村　かげ袋村
石部より草津まで二里十二町
かのかね鍛冶に
甲賀よりや津くゝ。ゑの本二柳

馬とくさも此あたりしハ近江(あふミ)乃国ハむかしより相撲(すまふ)と
いふかりの名ありて和部(わべ)草津(くさつ)乃両の宿より出合
て相撲(すまふ)とらしに草津乃まへは鏡(かゞみ)武佐(むさ)なる山
まではつまるまで石部(いしべ)のまへハ甲賀(かふか)まで四かうじ
がくろ此頃よりよさあつまりぐさひよ歯(は)がた
として其わどよ石部がたよりねしたもはべり。
草津(くさつ)がきとりの牛もありた犬名がたまゝゆきなび
ありてハ相撲(すまふ)乃元とそめしかひしへ今ハ
天下の牛すまれあるは所よりの日本ま相撲(すまふ)の
もじあらしハ神世(かみよ)乃つゆの人もありとかかつ牛之
いかせども幽さしく人王(にんわう)乃世まおよびく元の名
さくやえしハ垂仁(すいにん)天皇の御宇よきまりて

當麻(たえま)乃蹶速(けゑやさ)多野(の)見(ミ)宿祢(すくね)とつひきろりのぞ相(す)
撲(まふ)とバそりせうちうりして野見(のミ)の宿祢(すくね)ハ蹶速(けゑやさ)多
すこくされぬその後ハ惟喬(これたか)惟仁(これひと)乃親王(しんわう)の御
位あらそひ乃時ま紀名虎(きのなとら)と善雄(よしお)のかね
合相撲(すまふ)とらりて名虎(なとら)まけたりけり其後ハ
保野(ほくの)御津(みつ)が相撲とらしこ是より天下ま
く広く書曲(まいでん)ありといふ今とはまうろ。
元禄禁中(きんちう)ハ年乃初めに相撲乃節会(せちゑ)と
てなされ京そろやうにとなりて是ようによ
かくさみてゆくおとよ山もしかかれより比叡(ひえ)
乃山みしるかれるも
宿の町しくつ四里より大乃あさ一里ゆかり

三上ハ世にまた百足山とよぶハ此山又ハ二ちう
ならびなくして。かゝき富士乃山なり譜よみし
富士権現近江乃地となりて富士山とはいふ也
まひしより一夜のうちにつきのぼりたるすてに
あまく生じ。鑽にくらべ。言にまさりてあるにさ三
上山なりとよび。此をこそあやしめつくし人春実
天皇乃時に此あふミ乃水うミ一夜のうちにわ
きそその夜に富士山ハできあがり。そ此時しも
三上山もおなじく一夜のうちに山乃ぞ出の
わきみいし山乃かたちて鍛冶ゆくゆく物ならんと
くとさらにあ祝乃わがすまゐ。あなるさま八坊
とりいれ。

むかし此三上山は七まきまき海をひてなみ
百足あり。龍宮の龍乃乙姫にはみきめ龍神の
たびゆうしてろさんとしけると。俵藤太秀郷
弓二矢をて百足とおりり。そのかはりとんとて
米乃俵一つ。絹一ひき。釜乃鍋とをとかへり
寿るとを俵藤太とそろへ。このあがりに。かの俵を
米をとれどもつきず。米つきし絹はきれども
つきざりし。みなよ形でず。釜をさ絹なども
つきざりしとかや。鐘ハ三井寺にうつされて
あるかぎり黄金よりとうとくまゆりぬ
アそ今にあり。秀郷ハ天下まくれのなき
桐馬乃将門をうちてより。天下まくれのなき
つりのとなへばあらりしそうなり。されば今も此山

よはちかの石足わろしゆつるまで千載集
参議雅経朝臣の哥
ミさきの杉なミに此山の杉むらや
やとよろげ代の名所 奴ん
これ此山ニ榊掛ともあり又玉葉集読人不知の哥
志らずの酒や時雨てうき浮雲まよ
みよしの山そまつく雨
名の井村 一 尾の村 茶やあり

まかり村といへる。草津乃りやうてんは大
は男は乃せくゆく。あまさいまへり。善ははまで
ちとやすすり。かよの名とぞ。はなしと見ゆま
をうきけるらし。つやの人この此村乃茶他国よゆく
とぞその郷此年いつまぶうくぐうちうるくか
まされぞ。あまらよかげけて。三年まで海かは。
あまらこ当はおかりがのりまかときさし
り。人此めすみ得へんとは抱されて。都かハ
女乃腹のらまま成をさて廃のりしま。女あるみ
て十月とつまは。まひとけらみ出て。されるま
この村とまりみとつひなるを。略してよびて
いふとなうりぬ

左乃ろし笠松あり。木乃わきよ稲荷の神の社
あり　勾の村　川づら村　この村乃おもてれよ
川瀬の池あり今ハ沼あり
たかるうつり山乃ふもとよ至。湖海ふる石
りとふるう村　めうハ村　目村　新屋敷村
草津川あるあり橋あり長さ四十六間余
草津より大津まで三里十六町
春えう道中録する
はなりまや宝ゆらきこう乃宿の梅
知見が発句に
豆腐よりやく草津乃姥が餅でじ
みわなん人の発句に

りしてつひはなくなりてかの杯
宿の入口には札の辻あり。志らしにたゝあり。江
淡海をりて山にゆく　明神志まはり
やらし道おこまわり志のひさにゆけば矢橋の
渡りゆく舟はちかしのりて。横をゆうりて
大津まで。吉に歩とゆけど勢田のうけます。
楽しみ渡中すや矢橋まかせて舟まの生ばかし
みど二里ばかり近けれども。西風にはをろしくば
今日は歩でよしとて勢多へまはる。道ぞ
の山南の方家のこれかれかな。草津の
姥が餅名物　楽しみ
親つきはつるくさ津のうばが餅

姥が子のつやしにはかなかざるなり
野路の玉　こゝおよ篠原此里の絵あり。男
小宿うちむりつ兵衛依より親仔豆の國輕がふ
語とおそ。播とおげの不知に行き本地回帝の堤。
そのもろは部の東山のふもとにて不知ま。
姨まやまつれそわりけるが。ち年々やうあびて。
宮崎と思ひおもしく実事まてもりしょ。篠原の大
をなりて足つき縁づりまれこ。並みてはやと
実来まそでふぞりつてまかずふ延ろうず。かわす
づきとやひまひせろ不知まろとしてこころ
りのわり。高堤ちうつきよりて。倍のふこ此ろけ
ぞろくはまそりのふとぞ。守山の市にゆく

ありこし。ゆそうかすら乃名代ハ猶を申すぞ。紀之介
と申すとおろかなり。高縄ハふ覚え。つるま紀之介が
うまかりし都乃名をしてまぎ初陣なれぞ。おしも
ちやほまれ給へり。さみ上がりも寛文乃頃なりかる。
野州乃川をわたさる給へんす。川はりいそぞ。
その所にの世をく流して。びすてし。ゆらんとぞ
ゆらひまるんなりとかふ。紀之介をとぞ川ゆうひま
でうしやまけせり川を流り行がなりのかてそるを
かしらり。高縄こ乃馬りもやそうが物なりとうまし
くわひら。ろうりて川を渡り。生町のをはゆきそ
みりず。りをやなりのま人。川ではずとてそそ功業ハ
ワてしけおうしそ。能なりつそそ誉なり。それのうなき

鞭とわぞ。還退とぞさしてうけ。然ぞ紀之介をそ
よそい。ゆまく馬めすへ人をて進さつ乃。もでま
篠原堤つしそ。後ぐみさい朝霧らくて。人のあるみ
えず。高縄より立ちて。紀之介かずすまる人ぞんとぞ。
立より行よせてゆしころして。その馬をうち
乃り。実朝まれぞすり。つねに朝ら下とより。岳
どうして勲功を経るはずは。ゆうまの高縄を
遍江乃まとゆうちてゆうちぞ。空なぞ紀之介がのあ
まち待ちそ不断念仏をそしめ。ち領あまるつをそ
て後とみうこふくかれしとかすハ。高縄のうかとゝ
我乃をなり。楽乃保中ゆでう。かつ笑えりと篠原ゆう
それハ最愛別離苦実盛がぐだらしにしかり不あをぬみ

かの純友とこゝろしける木ハ。錦洲の川より東
なれど。こゝよりいけのほとりにてぞ。ことに便よし。
篠原堤とまうす。昔ハ篠原とまうせし也
此あたりなる野のうまに池あり。月輪の池となづく。
いにしへ此池に月のうつりけるをまつりけるに。かゝる
おもしろきながめをめでゝ。月さやかなりければ。
すべて此あたりの名所なり。此池も月の影を
あまたみせけり。さてひとつにしてかしこまり。
伯々酒をのみつゝ。月の水中にうつるをみて。
らんとして。死せしとぞ。歌
野路の玉川ハ今ハありしとぞなし。下にあり。
みな古への名也

左の方に茶やあり。此あたりの茶やといふ　大元ノ村
勢田邑　勢田の大橋九十六間あり。小橋のながさ
三十六間あり。むかし孝徳天皇の御時に。造之
押勝もかくとして。軍にやぶれしも。昔よりぞ
落行けれども。橋渡て帰る事ならず。高嶋にて
自害せしなり。又天智天皇の皇子大友ハ。浄見原
の天皇と戦ひしとき。よりてこゝにおひて。
浄見原ハ和邇の舟のまなをたゝかひけるに。
ひとつに並びあつて。伊賀伊勢をかぎりのひ。東国
のつはものとあまり。美濃の不破の関にて。
軍あるまじきとて。勢田にて落ちあひ
すへ。浄見原のつはものの勝よのりて遂に書せ封

まかりしかど。眞字はつきのみかどちかくせうあり。
眞字らが時。竹がやのゆかりにたのみ入まいて。
こゝに縁里をひらき。その時眞字は陣の総竹
のうちは末は名をはすかそもろ人あまく帰けり。
たのしへより。東國の軍兵の都をせめのぼりと
かせぐすへわかず宇治と勢田との橋をひきて。
おほつかなくおもはせど。敵陣して流しそのかみも
よびくありけるや

大橋のもとより。右のかたに石山寺乃境ミゆ。此寺ハ
東大寺乃良弁僧正乃草創なり。そのかミ聖
武天皇。東大寺乃大佛殿を建立ありけるに。
金銅十六丈此盧遮那佛を鋳させたまふに其の箔乃
料として黄金をもとめたまふ。良弁ハ毎日乃りて湖海
をたづねて。あまねくめぐりたまふに。一人の翁の
あらハれ出て。此所ハ里をつげ。良弁にしめし
所ハ。この山ハこれ観音乃霊地として金なり。ここ
にまかりて持念したまへとてうせにけり。
かくり。翁ハ比良乃明神なりき。良弁うやまひて
持念したまへば。この山乃金ハ。観喜したまふ。
これへりとぞ。其のち。初めて奥州より金を

をさめたてまつる。これによりて。大佛成就せし
まりのふしぎ也。これひとへにこの観音のちからなり
とて。石山寺は草創しありけり
み上東門院乃女房紫式部ハ石山寺にこもり。観
音にいのりをかけまつり。八月十五夜乃月。湖水に
うつりけるを見て。水想観を成就し。自然と
ゆそ源氏物語をつくり。須磨明石の巻よりを
書けるとぞ。今もやかて良弁乃筆につきて
いおくれかの神ぞありけり
小橋より右にしたがひ。水の方をミれば。湖水に比類なきの
くさ辛崎乃松もつゞきて。そのかた田乃ほとり。浮御堂
もみえけり。ひ中より。かの浮御堂ハ。恵心僧都此

はくりのうち一千躰の阿弥陀仏也。中比まであらはれしが
としふりて退転におよびしとかや。ひだりに
別とそびゆく。安置し侍り。かの恵心の御作の
阿弥陀ハ。霊しうありしゆゑにそのあたりの人くハ堅田千躰
とぞ。まさしくみどりてとやすらふや
堅田の浦之ハ。白鬚。比良。小松なり。又みゆるなる沖
島へはるかかなたの尾崎ハ。大藻とよぶ所也。今津海津
いはずかたなれどみへず。
湖東の東。左の方にとをくへゆけハ。長命寺の観音
なり。善根の観音ハ。奥津山の中まゐなり。沖まにゆるかハ。
こゝ沖の嶋なり。そのあたり小竹生嶋なり。竹嶋
いつくしへ景行天皇此浮洲にかへりて浮み堂なり。

湖の中に弁才天おはします。行基菩薩の作
なり。島ハこゝ水精輪。みやまのあまた念ばまて。
あまりうつくしきに。鏡岩よりあかつき草木
きのかりく姫せり。かのむやくるの月浦中に
見えでハ竜も浮ぞとしるかをや。海上にて
あさるなり也。
うせきり石津のハ。けるかなれバみへず。志那
の浦ハ又。蓮乃名所也。蓮乃花ア。双翅かハ。
こりのありしあふもや。志那乃浦へ。双
辺の白蓮花咲たるこそおもしろけれ。宝仏をそへてくる
不なれバ。橋のなかりいみてしかし
何事もかくはえぎらしろさ。明月のころの此景ならり。

そのむかし行基ぼさつひとりみやこよりまうで給ふ所なり。
楊の南ゐたるに。石山といふ所にいたりて。大なる洞あり。
此内より毎夜龍燈出る事。いく千万とも数しら
ず。穏のかみなそこにとびちり。数万此堂一宇の
つまり。丸くなりて。今は森あり。みなもと
より流れ出て此より落ては。とどろきちりて流るゝ
面白き事いふばかりなし。都方の好事の人々。
秋の夜こゝに来りて。こゝに月見す。神事の
見物し。此所流れて。宇治川にいたる。蛍もここ
て流れ出るか。宇治川にては。蛍ケ谷ありとかや
宇治の辺まで。これとどろもかゝる一しほ見
物なりしとや

鳥居川村　これより右につゞきてほそ道あり。
いしやまより程なり。むかしわたりは松が二三町ばかりさき
なり。右のかた田の中に。今井四郎兼平が塚あり
膳所　右の方に八幡の宮あり。又新羅明神
の祠あり。此の神は三井寺の鎮守なり。智証大師
の唐より帰朝ありしとき。舟の中に一人の翁
あらはれていはく。我はこれ新羅国の神也。仏法守
護のために。日本国に渡り給ふなり。大師す
なはち三井寺のちん守とします
中庄村　世よりよりつたへきたるかのつゞみのもとの地頭に。
この所そのむかし此所は粟の飯とまをしなく
田畑民家此祠として又あり

山王神事の日。ここより御供とうる人まゐりしに。
膳所の名ある也。今略して。ぜゞといふ也。城ハ本多主
粟津原 いにしへ木曽義仲と九郎義経とたゝか
ひて軍やぶれ。ちりぢりにわかれ粟津の深田に馬をとゞめしを。
ぬけんともすれどもあがらずして。そのひたひに流矢
にあたりてうせしところのしるし也
番馬村 小川といふ所。ある所北川といひし川と
いふ川の人家の右に三間ほどのところに木曽義仲塚あり。
大きに椋の木あり。それをしるしとす。深田也。これ
あるからに此項羽ハ海をこえ乃のちり雲名とよ
ばれ大木根堀して捨をすてられども百万の軍兵
[illegible]勇者なれバつゐにを漢の
高祖にされ。かの義仲ハ平家の侍を西海に追おとし
つひにみづから旭将軍となのりしかども。只血気の勇を
専にして仁義をしらず。これがために勲功つゐに地に
おちて。つゐに義経のためにほろびたまひしと
比叡山ハこれ王城の鬼門を守り。天台の法灯をかゝげ。
一仏乗の道をみがきて。四明洞のひかりをかゞやかせり。
伝教大師より草創して。むかしハ三千余の衆徒を
らべ。大衆[illegible]こりしかど。後白河院ハ朕がまゝな
らぬものハ賀茂川の水と。双六の賽と。山法師也
とのたまひしとかや。今ハ[illegible]を[illegible]として衆の[illegible]
[illegible]ずかりすべる。麓に山王権現。滋賀[illegible]
てみ[illegible]後より。此山の中ハ[illegible]

松もと村　ありつき也。松もとの内より二筋の道わかれ
より右の道ハ海づら猟師町。中だうの道はあつまぢ
ちかく大津へ出る

大津より京まで三里

むかし天智天皇の御時に大津の宮をたてらるゝ志賀の都といふはこれなり。詞花集に伊勢大輔がうた

見るかゞみしそあふみの海ハかすかなれ

昔るふかはらぬ人ぞちかのうら風

千載集に読人しらずの哥

さゝ浪やしかの都ハあれにしを

むかしながら此山ざくらかな

又新古今に法性寺入道前太政大臣哥

さゝ浪や志賀のから崎風さえて

大津の里より三井のてらへ行なり。園城寺あり。教待和尚の住のひし伽藍。智證大師の草創なり。天智天武持統これ三帝の御誕生の御産湯ハこの寺の井の水を汲てまゐらすゆゑに三井寺と名付られし也。

町すぢより高観音へゆく。舞台より湖水を眺ておもしろき所也。この堂の下をつたひてゆけバ坂本へおりるみちなり。小関越なり。東ハ山科の藪の下石橋におりる也

大津の続飯や町とて八町と名づく。是より上に関の明神あり。内に関の清水あり。拾遺集に貫之の哥

逢坂の関の清水に影みえて

今やひくらん望月の駒

千載集に藤原範永朝臣の歌

あかし明乃月も浪にやどりけり
今ハこえし逢坂乃関
関乃明神ハ蝉丸にておはしますなり。此ゆくも
かへるもしるもしらぬも歌ハ蝉丸の手也。相坂山
によこたはりて琵琶を弾じ世をのがれて居たまひしとぞ
その時の歌
世乃中ハとてもかくてもおなじこと
宮もわら屋もはてしなければ
と詠じのち帝乃庵りちかく此の総なり。深草此
天皇乃御時良峯乃かね家貞僧におほせて
僧正遍照よりかゝりしげすみよりの作せしを
しらせし家ハそのまゝありて和琴とおもひしを

さりや蝉丸ハ琵琶和琴此さうにて妙をのべ世にたぐひ
なかりしとぞ海の記にて延喜帝の御子にて其所
すれハこの関此あたりと云の文河原と云なり
新後撰集に源の清蔭の哥
擬宝ハ音にしられそあふ坂乃
関乃此ころの都へそ明ぬる
玉葉集に常盤井入道太政大臣の歌
与せ来てやハ行もゆらんあふ坂此
関乃このやの秋の夕暮
又新後拾遺集に平時村朝臣の哥
都出て今日しら山もあふ坂乃
関やはやのゝむかし帰らん

実方いへし小野乃小町かともみしかなるらむや乃總
ありとも。小町ハ狂乱して乞食となり。古よりの
姿となりそそのおもひぬし乃ちにさすらへ。家を
て乃ちすたれしとぞ。死せし所ハ小山なと市原野也
又小町が石塔あり。又なお東山に業平朝臣墓所
ありつけしも市東野人によはされて。今乃上代句
とて君みる都やとや

秋風のふくにつけてもあなめあなめ
とはいはじ。ここに薄生ひてそれハ舎
利のへ乃目より。一もとのすゝき生ひ出て風にも
なびく薬草也。業平至りて
小野とはいはじすゝき生ひけり

こと下乃かたハつもりく。か乃舎利をくべしとて。石塔を
よそしまけるが。小町ハ家かたのぞりてうけつぐあり
なりといふや也。又空海和尚の作也とて。玉造と云
書一巻あり。小町がありさまをうつせりのなり。
小町と空海とハ世をへだつれバゆかし。又
卒婆しかかりし也。小町ハ夜通嫁乃深草のみ
て。宮都乃剛深をこころみし名人かりくその紙乃
作ぐらにやしきなり。又ここ生まれりかがし
大岩（じゅま）なとよしに山あり。あれなど京まで都

ここの地。
追分　ここより伏見へこえる也。在乃名を知りこそ。
ゆけぞのぞうまあり。楽阿弥やまや。男在ハ大坂

すぐに。奈良より醍醐へ御入。勧修寺よりとゐる
山科といふ所へ入。狼谷より。藤の森と申し所へ此
後へわたく。毎月のうち六日目は大坂よりつきたる人
おかわりなく人足一人めしつかひ日は暮ぐるゝ也。此の狼谷
は山ぎらひあり。奈良道中の人はくたびれおほくして
みな人はようやくしまひなり。なれどもみ若よく名所より
こやかに也。道の中にて京への便りもなし。奈良へこ
ちらさまへもかへしたる人へ宿はる事かし備中さまへ
よりは男もかえりして。京へさしてすゝみける。此
かり也

終